

『学び合い』実践者の不安と継続意識に関する研究

加藤 優宜*・二ッ橋 弘純**・西川 純***

(平成25年9月1日受付；平成25年10月22日受理)

要 旨

本研究では『学び合い』を実践している教師を対象に、『学び合い』実践者の意識における共通点を明らかにすることを目的とした。

実践者にアンケート調査を行い分析を行った結果、以下の知見を得た。

- ・『学び合い』実践を始めるきっかけは、人間関係の改善やその問題点の解消を図るため、また子どもの学力の向上や教師の授業力の向上を図るためであることが明らかとなった。
- ・『学び合い』実践者が抱く不安は、「子ども観」、「授業観」、「同僚・保護者の理解」に関するものであることが明らかとなった。
- ・『学び合い』実践者が継続して実践できる理由は、「子どもの言葉や姿」、「実用性がある」ことであることが明らかとなった。

KEY WORDS

教員の資質向上 教員の同僚性 『学び合い』

1 問題の所在

中央教育審議会（2006）は、「教員の質の確保、教員の多忙感と同僚性の希薄化が指摘されており、教員間の学び合いや支え合い、協働する力が重要である。」⁽¹⁾と述べている。また中央教育審議会（2012）は、教員に求められる資質能力として「新たな学びを展開できる実践的指導力（知識・技能を活用する学習活動や課題探究型の学習、協働的な学びなどをデザインできる指導力）」⁽²⁾を挙げている。

教員の同僚性について坂野（2008）は、「教員が同僚性を発揮するためには複数の教員同士がお互いの経験を交換し合いながら対話を行うことが重要であり、教員同士の相互作用により、よりよい解決策を生み出すことが可能である」⁽³⁾とし、教員の同僚性を発揮するためには、教員同士の『学び合い』が有効であると明らかにした。

『学び合い』とは、「学校は、多様な人と折り合いをつけて自らの課題を達成する経験を通して、その有効性を実感し、より多くの人が自分の同僚であることを学ぶ場であるという学校観、子どもたちは有能であるという子ども観、教師の仕事は、目標の設定、評価、環境の整備であるという授業」⁽⁴⁾からなる、西川（2011）が提唱する考え方である。

『学び合い』授業の実践において、小野村ら（2006）は、「学習者の自由なコミュニケーションの場を保障することで、成績にかかわらず、学習者は教え手・学び手となりながら、自己に応じて学ぶ」ことを明らかにしている⁽⁵⁾。また小林（2007）は、「『学び合い』授業を実践することによって、学級全体の子どもの学習の進行と、教師自身が気にかかる子どもへの個別対応とを同時に進行することが可能であり、気にかかる子どもにより多くの時間を費やすことができる」⁽⁶⁾と述べており、教員の多忙感の軽減と協働的な学びとしての効果があり、教員の資質向上を図ることができると考えられる。

しかし効果が示される一方で、山田ら（2007）によると、「学習者の有能性を実感している教師であっても、教科学習において、教師は指導者であるという固定観念に縛られる姿がある」⁽⁷⁾とし、容易には学習者主体の授業を受け入れにくい様子があったことを示唆している。『学び合い』実践の効果を感じつつも、「実践するには多くの不安があったに違いない」⁽⁸⁾と述べている。また岩崎ら（2008）は、「教師が『学び合い』を実践する際に抱く不安は、授業の最後にまとめをしないことである」⁽⁹⁾と述べている。

これまでの研究は単一の学校を対象に調査をしており、複数の学校や校種の実践者を対象にした『学び合い』実践

時に抱く不安や、このような不安がありながらも、『学び合い』を継続して実践できる理由を明らかにした研究は見当たらない。

2 研究目的

本研究は、『学び合い』を実践している教師を対象に、『学び合い』実践者の意識における共通点を明らかにする。

3 研究方法

3.1 調査内容

『学び合い』実践者の意識における共通点を明らかにするため、以下の3点にどのような傾向があるか明らかにする。

- ・『学び合い』を始めたきっかけ
- ・『学び合い』を実践していて抱く不安・悩み
- ・『学び合い』を継続して実践できる理由

3.2 調査期間

2011年10月中旬

3.3 調査対象

全国の公立小学校・中学校で『学び合い』を実践している教師16名。
調査対象の『学び合い』実践の経験年数は約2週間～5年であった。

3.4 調査方法

『学び合い』実践者に対しアンケート調査を行った。
質問内容は以下のように設定し、それぞれ自由記述形式で依頼した。(表1)

表1 アンケートの質問内容

- | |
|---|
| <p>(1) 『学び合い』を始めたきっかけを教えてください。</p> <p>(2) 『学び合い』を実践していて不安になることやその場面を教えてください。</p> <p>(3) 『学び合い』を継続できる一番の要因は何ですか？</p> |
|---|

3.5 調査結果

3.5.1 『学び合い』を始めたきっかけについて

アンケート調査の項目①で得られた代表的な記述例を以下に示す。(表2)

表2 『学び合い』を始めたきっかけに関する代表的な記述例

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 教員として、小規模中学校における人間関係の改善を図りたいと考え、『学び合い』を導入した。 ・ 学級内にいじめらしい傾向が見られたため。 ・ 勉強ができない、分からない子をなんとかしたい。 ・ 難易度の高い問題を多くの生徒が理解する方法を色々考え試していた。 |
|---|

人間関係の改善やその問題点の解消を図るために『学び合い』を始めていることが分かる。また子どもの学力の向上、教師の授業力の向上を図るために『学び合い』を始めていることも分かる。

3.5.2 『学び合い』を実践していて抱く不安・悩みについて

アンケート調査の項目②から、『学び合い』を実践する際に抱く不安・悩みを、『学び合い』の考え方である「学校観」、「子ども観」、「授業観」、そして「同僚・保護者の理解」に分類することができた。それぞれの項目の代表的な記述例を以下に示す。(表3～表6)

表3 学校観に関する代表的な記述例

なかなか全員「みんな」が徹底できない。

表4 子ども観に関する代表的な記述例

- ・子どもが本当に理解しているのか。
- ・表面的な理解になっていないか。
- ・前年度、学級崩壊をしていた学年だったので、人間関係作りが必要と感じ、4月からすぐに実践してみたが本当に良くなっていくのか、学力がつくのか結果が不安です。
- ・子どもは有能であるということに不安を感じてしまい、自分が教えなければとか、今は時間がないから教師が教える授業でしようがないと思ったりする。

表5 授業観に関する代表的な記述例

- ・課題の設定（全員の子に伝わるようにすること）。
- ・課題設定をどうするか、達成できなかった子のフォロー。
- ・語りが甘い。

表6 同僚・保護者の理解に関する代表的な記述例

- ・保護者を説得すること。
- ・同僚の人から質問されて答えられない時など。
- ・管理職・保護者からのクレーム。

アンケート調査の項目②の回答を上記の項目に分類し、集計した結果を以下に示す。(表7)

なお複数項目にまたがる記述は、それぞれの項目に1としてカウントした。その結果、記述数19が得られた。

表7 困難の種類と記述数の割合

困難の種類	記述数	(n=19)
子ども観	6	(31.6%)
授業観	5	(26.3%)
同僚・保護者の理解	4	(21.0%)
学校観	1	(5.3%)
その他	3	(15.8%)

分類した結果、『学び合い』実践者が抱く不安は、「子ども観」、「授業観」、「同僚・保護者の理解」に関する記述内容が多数を占めることが明らかとなった。

3.5.3 『学び合い』を継続して実践できる理由について

アンケート調査の項目③から、『学び合い』を継続して実践できる理由を、「子どもの言葉や姿」、「実用性がある」、「『学び合い』の考え方に共感」に分類することができた。それぞれの項目の代表的な記述例を以下に示す。(表8～表10)

表8 子どもの言葉や姿に関する代表的な記述例

- ・子どもたちの学び合っている顔，分かった！できた！の声です。
- ・自然な会話の中で分からないことが分かるようになる。子どもたちが生き生きと学び，特にわからない，できない子が友と本気になって学習に取り組む姿を日々見ていることだと思われる。
- ・子どもの学び合う姿が素敵だから。
- ・分からない子が分かるようになる。→子どもたちの良い表情。
- ・子どもが楽しみながらやっていること。

表9 実用性があるに関する代表的な記述例

- ・子どもが主体的に学べる。(担任が不在でも授業が進む。)
- ・やるべきこと(学習すべきこと)が明確になっているので，1時間1時間の授業の進め方に迷わなくなったこと。
- ・学級経営にも活用でき，有効だと感じたから。

表10 『学び合い』の考え方に共感に関する代表的な記述例

- ・自分の思いと学び合いの考え方が近く受け入れやすい。
- ・すべての子どもの成長を願っていること。

アンケート調査の項目③の回答を上記の項目に分類し，集計した結果を次頁に示す。(表11)
なお複数項目にまたがる記述は，それぞれの項目に1としてカウントした。その結果，記述数22が得られた。

表11 実践を継続できる理由と記述数の割合

理由	記述数	(n=22)
子どもの言葉や姿	11	(50.0%)
実用性がある	7	(31.8%)
『学び合い』の考え方に共感	2	(9.1%)
その他	2	(9.1%)

分類した結果，『学び合い』実践者が継続して実践できる理由は，「子どもの言葉や姿」，「実用性がある」に関する記述内容が多数を占めることが明らかとなった。

4 結論

本研究では，『学び合い』を実践している教師を対象に，『学び合い』実践者の意識における共通点を明らかにすることを目的とした。その結果，以下の3点が明らかとなった。

- ・『学び合い』実践を始めるきっかけは，人間関係の改善やその問題点の解消を図るため，また子どもの学力の向上や教師の授業力の向上を図るためであることが明らかとなった。
- ・『学び合い』実践者が抱く不安は，「子ども観」，「授業観」，「同僚・保護者の理解」に関する記述内容が多数を占めることが明らかとなった。
- ・『学び合い』実践者が継続して実践できる理由は，「子どもの言葉や姿」，「実用性がある」に関する記述内容が多数を占めることが明らかとなった。

5 今後の課題

今回の調査では勤続年数や『学び合い』実践歴に着目した分析をしなかった。この分析が今回の調査結果にどのような影響を及ぼすのか追研究していく必要がある。

また本研究では調査対象に限定しており、有効回答数が十分ではなかった。より実態に沿った調査をしていくために、引き続きデータを収集していく必要がある。

引用及び参考文献

- (1) 中央教育審議会：「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申) (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910/003.htm)」(2013.2.13閲覧), 2006.
- (2) 中央教育審議会：「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申) (http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf)」(2013.2.13閲覧), p.2, 2012.
- (3) 坂野智之・西川純：「教員同士の『学び合い』に関する研究」, pp.28-29, 臨床教科教育学会誌 8(1), 2008.
- (4) 西川純：「『学び合い』の手引書 (<http://dl.dropbox.com/u/352241/manabiai-data/net-book/tebiki.pdf>)」(2012.11.4閲覧), p.11, 2011.
- (5) 小野村リサ・西川純：「中学校理科学習における生徒間の『教え手・学び手』関係と成績の関連」, pp.75-82, 日本理科教育学会誌 47(1), 2006.
- (6) 小林千鶴・西川純：「子ども同士の学び合いを促す教師に関する研究」, pp.52-53, 臨床教科教育学会誌 7(1), 2007.
- (7) 山田純一・西川純：「子ども有能性を実感した教師の変容」, pp103-126, 臨床教科教育学会誌 7(1), 2007.
- (8) 同上書(7)
- (9) 岩崎太樹・水落芳明・西川純：「『学び合い』授業における学習者の意識と行動—教師の『学び合い』への不安をもとに—」, pp.41-56, 臨床教科教育学会誌 8(1), 2008.

Manabiai : A Study on Uneasiness and Motivation Education practitioners have with Elementary School Students

Masaki KATO* · Hirozumi FUTATSUBASHI** · Jun NISHIKAWA***

ABSTRACT

We focus on “Manabiai” practitioners, and the purpose of this research is to clarify the difficulties which “Manabiai” practitioners have and how to solve them. The subjects of our research are restricted to the only “Manabiai” practitioners who have no cooperators at their schools, and we compare the results with the difficulties of “manabiai” practitioners who have some collaborators.

- As a result, we could make it clear that the only “Manabiai” practitioners realized more difficulties than the practitioners at their schools.
- We made sure that the way to solve their difficulties was to collect information which they needed, going along with others around them, asking for their help. And this is the same way as children do when they accomplish their tasks using “Manabiai” method.

* Ousawa Lower Secondary School

** Hamajiri Elementary School

*** School Education